

王者の妻

永井路子



王者の妻

永井路子

王者の妻

昭和四十六年十二月八日 第一刷発行

昭和五十六年四月十日 第八刷発行

著者 永井路子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二―二二

郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表)

振替 東京八―三九三〇

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 株式会社 黒岩大光堂

定価 九八〇円

著者・乱丁本はお取り替えます。

© 永井路子 昭和四十六年

Printed in Japan

0093-300465-2253 (2) (文2)

王者の妻
目次

よい話	……	七
すがき藁	……	一七
のぞみは城	……	二九
華やかな行列	……	四一
こんふえいとす	……	五三
袋の小豆	……	六六
於次丸	……	八三
「こんこたうたん」	……	一〇七
播磨路	……	一二九
飛報	……	一三七
新たなる敵	……	一四三

黄金の城	一七二
つむじ風	一八三
淀の女王	一九九
狐つき	二二五
地獄変相	二二六
夢のまた夢	二六二
退却	二七五
天下分け目	二八二
東山夕景	三〇二
魔の登音	三三三
遠い炎	三三三

装幀 佐多芳郎

王者の妻

よ い 話

夢見ごこちとはこの事であろう。

両の乳のあわいを、たえずくすぐられているような、何とも落ちつかないこの気持。

そしてその胸のあたりから、魂とやらいうものが、ついふわふわと浮かれてゆき、つづいてからだもそれを追って、思わず宙を踏むような――。

いや、残念ながらそうは行かない。なるうことなら、そんなふうになつてみたいのだが、忍者にあらぬおねねは、いつに変わらぬ殊勝げな顔をして、さりげなく縫いものをしていなければならぬ。

さりげなく？

――そう、そのとおり、そのとおり。

それが女というもののたしなみなんだから、とおねねは自分に言つてきかせて、縫いものの方へ目をおとす。

藍の色がおうばかりの麻の小袖は、今日はさみを入れ縫いだしたばかりである。この秋の仕着せにと伯母が出

してくれた糸の細い麻の布を、妹のおややおそろいに染めあげて、いま、またそろって袖を縫いはじめたところなのだ。

おねねは十四、おややは九つ。父の杉原定利に死にわかれ、伯母の家に養われるようになってからもう数年たつ。伯母のつれあい、浅野又右衛門長勝は、ここ織田家のお弓衆頭、侍仲間からみれば下っ端だが、軽輩ぞろいの一族の中では出世頭である。

なかなか親切な人で、父が死んだときも、あとをついだ兄の家定の身の立つように後楯になつてくれ、若い身そらで妹たちのめんどうまでは見きれまいと、おねねたちをひきとつてくれた。

しかも、この夫婦には子供がなかったので、おねねたちは、ほんとうの娘のようにかわいがられた。縫いもの、染めもの、機織りは、伯母が手をとつておねねに教えてくれた。そして今度は、おねねが、おややに教えてやる番なのである。

ところが、このおややと来た日には――。

口ばかりたつしゃで、その上あわてものなので、世話のやけることおびたらしい。この間も裁ちあわせをしていて、布が足りないで大騒ぎをするので調べてみたら、袖を三枚もとつていて、

「ああ、そうか、腕は二本だった」

などと言うしまつたのである。だから、

「そら、針を落とした」

「ほれ、へらづけをまちがえた」

と、縫いものの間じゅう、おややにかかりきりなのだが、

今日のおねねは、それどころではない。

それはなぜか？ 運命の幕をひらく瞬間が、彼女におとずれようとしているからだ。幕のひき手は、浅野家の奥の間に坐っている「あのお方」である。

——ああ……

息がつまりそうになったとき、そばでおややの声がした。

「あねちや、あねちやてば」

おややは、おねねのことを、

「あねちや」

と呼ぶ。口のたっしやになつた今でも、これだけは舌のまわらないころの言い方がなおらないのだ。

よばれて、おねねは我にかえた。からだからなかばさまよいだしていた魂が、やっといつもの場所におちついたような気がして、姉らしい落ちつきをとりもどした。

「縫えたの？」

「うん、ほら」

「どれどれ」

縫い目はまがつているが、どうやら折り目のつけ方もまちがってはいないようだ。

「まあいいけど、縫い目がちよっとおそまつね。これじゃあ蛇のたくつてみたい。今度からはもっと気をつけな

さいね。ほら、こんなふうに」

自分のを見せてやると、しばらく手にとつてながめていたおややが、とつぜん、

「キーツ」

猛烈な笑い声を上げるなり、袖をほうりだして、部屋のなかにひっくりかえつた。

「な、なによ」

おねねはあわてた。

——なんとということか。女の子が、とほうもない声をあげて笑いだすなんて……

第一、奥の間にいる「あのお方」にきこえたら何とお思ひになるだろう。

急いで口にふたをしようとする、おややはその手をはねのけ、ひっくりかえつたまま、足をばたばたさせて、なおもきやっきやっつと笑いころげるのだった。

「あねちや、あねちやてば、あはは、あはは」

「しいっ、おややつ」

こわい顔にしても、いっこうにききめがない。

「けけけ、きやきや、きーっ、きーっ」

好きかつてな声でわめきちらし、しまいには苦しそうに横腹をおさえながら、

「その袖、その袖」

おややは、からだを折りまげ、顔を真っ赤にして、袖を指さした。

「その袖、あねちや、自分の腕、通してみ」

「え？」

急いでひろいあげ、右の腕を通そうとして、おねねは、あつ、という顔になった。

手が出ない。

それもそのはず。

たんねんに針目はそろっていただけでも、その袖は、ごていねいにも、袖下から袖口まで縫いふさいであるではないか！

——まあ……

「きーっ」

おややは跳ねあがってよろこんでいる。

——まあ、私としたことが……

心ここにあらず、だからだ。

と、今まで笑いころげていたおややが、急におませな表情を作った。

「しようがない。あのお方がおいでだものね」

あのお方。

いま浅野家の奥の間に坐っている「あのお方」のことは、織田家で知らないものはない。

とにかく、たいへんな美男である。前髪立ちのころ、領主織田信長の寵童だったといううわさもある。家柄もいい。代々尾張荒子の城主として二千貫文の地を領していた家の四男坊だ。

金もあり、毛なみもよい貴公子のあのお方。

いや、もう「あのお方」などという、もってまわった言いはよそう。そろそろその名をあかすときが来ているようだ。

前田又左衛門利家。かつては犬千代とよばれた彼はそのころ二十三歳の美青年になっていた。

しかも、ただのにやけた色男ではない。十四歳で初陣したとき、敵の部将に眼の下を射られたが、その矢を抜きもせずに大槍で相手を突きふせ、首をあげたので、信長の激賞をうけ、百貫文の地を与えられた。

が、その後、まもなく、彼はある事件をひきおこした。

ささいなことで、信長お気に入りのお朋衆の十阿弥という男を殺してしまったのだ。おかげで信長の逆鱗にふれ、長の暇を申し渡され、せつかくの恩賞もふいにした。

それからしばらくは浪々の身となっていたのだが、去年、桶狭間の合戦が始まると、大身の槍をひっさげて、忽然として戦場に姿を現わした。この合戦は信長が東海の雄今川義元を倒し、天下取りの第一歩をふみだした歴史的な戦いだが、利家もまた、

——帰参の好機！

と思ったのだろう。縦横無尽に荒れ狂い、一番先に敵の首をあげたが、信長はほめるどころか、言葉ひとつかけてくれない。と、利家はやにわに首をほうりなげ、戦場にとって返して、また一つ首をあげた。が、信長はとうとう最

後まで、

「よくやった」

とは言わなかった。

それでも利家はあきらめなかった。越えて今年、美濃の森部で長井甲斐守と一戦を交えたときも真先かけて敵の首を二つあげた。彼が血にまみれ、泥にまみれた姿で首をひっさげて平伏したとき、はじめて、

「又左……」

と信長はその名を呼んだという。

もともと、しんそこ憎い又左ではなかった。それどころか、自分によく似た激情型の若者を、信長は好きで好きでたまらなかつたのだ。それがかわいさ余つて憎さ百倍だったのだから、ゆるすとなると今度は愛情がせきを切つた。

「ただちに前に数倍する四百五十貫文の地が与えられ、赤母衣が許された。戦場で赤いほろをかけることを許されることは、第一級の勇者として認められたことである。」

利家はいまや織田家きつてのスターであつた。そしておねねが、彼の存在に気をとられ始めたのも、ちようどそのころからだつた。

赤母衣武者の利家は、武勇談ばかりでなく、もう一つの面でも、かなり有名な存在だつた。

たいへんなおしやれなのである。それもふつうのおしやれではない。はでな、人々をぎよつとさせるようなおしやれで、これを当時の言葉でカブキ者といつた。今の歌舞伎

の語源はこれである。

つまり利家は、今でいえば、金持の息子で毛なみもよく、世界チャンピオンをとるようなスポーツ・マンで、流汗の先端を切つたかっこうでのし歩くといつたタイプだつたのだ。

もつとも信長が、茶筌ちまき鬚に、しめなわをぐるぐる巻きにした脇差しをさして歩いたのも、逆手のおしやれのようなものだから、この点でも彼らは似たもの主従だといえるかもしれない。

こんなわけだから、利家が、はでな小袖にきらびやかな太刀をはいて清洲の城下町を歩けば、誰でも、

「ああ、あれが、赤母衣又左どのだ」

と気がつく。そしておねねも、その例外ではなかつたのである。

ひと月前ぐらいのことだつた。

通りかかつた町の辻で、商人が瓜を売つていた。柿色のかたばらに、黒頭巾の頭をふりたてて、

「瓜めせ、瓜めせ」

とよぶ声につられて、おねねはふと立ちどまつた。商人のまわりには、すでにかなりの人だかりがしている。

瓜は、おややの大好物だ。

——買って行ってやろうかしら……

人垣ごしに品さだめをしようとしたが、我も我もと手を出す客が多くて、なかなか番が回つて来そうもない。

——やめとこ。

思いなおして人垣を離れようとしたとき、危く、おねねは、きらびやかな段熨斗しのぼ目の小袖の胸にぶつかりそうになつた。

あわてて、身をかわしながら、

「あ……」

思わず息を呑んだ。あの有名な赤母衣又左の顔が、彼女の真上にあつた。

——ま、どうしよう。

どうやってその場から逃げ去つたかおぼえていない。

五、六間小走りに走つてから、おそるおそるふりかえつてみると、なんと、赤母衣又左は、じつと彼女をみつめていてではないか……

足がぶるぶるふるえた。

——見てる、あのお方が。

わざと気づかないふりをして歩きだしたが、背すじがみるみるこわばつた。自分でも、からくり人形のような歩き方になつてゐるのがわかつた。そしてそのこわばつた背すじの一点がきりきり痛んだ。

——あのお方が、見てらっしゃる。

女の勘のようなものが働いたが、それでいて不安でならない。ついにたまらなくなつて、おねねはそつと後をふりむいた。

と、おねねの勘はまさしく的中していた。赤母衣又左ど

のは、まだ彼女の後姿を見送つていたのである。

ふつ、と体じゅうの筋肉が一時にゆるむかんじだつた。

——やっぱり、見てらした……

それからは足どりにゆとりができた。自分が人目につくほどの目鼻だちに生まれてきたことを、これほどうれしく思つたことはなかつた。

「おねねどの、きりようよしだ」

これまでもずいぶんこう言われたが、今まで彼女は自分で美人だと思つたことはない。ほめられれば悪い気持はしない、という程度である。

「姉さまじゃけ、年よりおとなに見えるな」

こういわれたこともある。たしかに女になるのも早かつたし、十七、八に見られたことも一度や二度ではない。

——どうやら、あのお方も、私を女としてみとめてくれたらしい……

赤母衣又左がみつめてくれたというだけで、おねねは十分に幸福なのであつた。

ところが——。

偶然と言おうか何と言おうか、それ以来、おねねは、清洲の城下で、よく又左とすれちがつた。そしてそのたび、又左が、人一倍深々としたまなざしを送ってくるように、おねねには思われた。

しかも、それからまもなく、彼女は伯父の配下の弓衆のひとり、弥兵衛という男から妙なことを聞かれたのだ。

「おねねさまは前田又左さまと知りあいかね」

弥兵衛はおねねより一つ年上の十五歳、伯父の又右衛門の親類で、弓衆の中でも最も目をかけられている若者だった。

「又左さまを、私が？ そんなこと」

おねねは即座に首をふった。

「弥兵衛どのはどうしてそのようなことを？」

「いや、今日、又左さまに呼ばれてね、おねねさまのことを聞かれたもんだから」

「まあ、なんて？」

「おねねどの、浅野又右衛門の娘御かって。それから」

「それから？」

「まあ、いろいろとね」

弥兵衛はにやりとした。

「いやなひと」

おねねは大きな眼でにらみつけてやった。

——それにしても、どうしてあのお方は、私の名前をご存じなのかしら。

からだじゅうが、ぱあっと桜色にいろどられて行くのを弥兵衛にみすかされるような気がして、思わず袷をかきあわせた。

それから今日まで約半月、なんとあわただしく日が過ぎていったことだろう。うわさにたがわず一本気で、それに

多分にせつかりしい又左は、遂に浅野家に現われたのだ。

——もしや？ ええ、もしかすると……

おねねがある期待を持ったとしても、これはやむを得ないことではないか……

又左が浅野家をおとずれてから、すでにかなりの時がたっている。

が、奥の間のふすまはびたりと閉ざされたまま、物音ひとつしないのが、おねねには少し気がかりである。

——どうしたのかしら？ のぞいて来ようかしら。

と、思ったとたん、おねねは、ぎくりとさせられた。

「どうしたのかな。のぞいて来ようか」

おねねが考えていたとおりのことを、その耳で聞いたからなのだ。

——あ、わ……

心の中をすっぱぬかれてうろたえてふりむくと、おややが丸い眼をしてみつめている。

「まあ、いやな子」

おねねはますますうろたえた。たった九つ、それも姉に似ず小柄でやせっぽちのくせに、妙におませなこの妹は、どうやら姉の気持をすっかり読みとっているらしい。もともと又左のことなど何もうちあけていないのに、何から何までのみこみ顔で、自分をからかおうというのだろうか。

「だめ、そんなことするもんじゃありません」

にらんでも、おややは平気である。

「だって、あねちゃだって、聞きたいんでしょ。又左さまが何とおっしゃったか」

「まあ」

「きつと、おややは……だと思う」

わざと言葉をぼかして、意味ありげな顔をした。

「え、なんですって」

それには答えず、すまして言った。

「悪くないなア」

「何が」

「いいお家のお侍で、強くつてさ。お馬があつて、背が高くて——」

「おやや、なんてことを」

「お金があつて、有名で——」

「およし、およしつたら」

おねねはあわてておややの手をつかんだ。

何ということをいうの、お前は。

たしなめようとして、ますますおねねはへどもどした。

おややがいまあげすけにいったとそっくりのことを、今の今まで考えていたからなのだ……

と、そのとき、奥のふすまのすべる音がして、きゅっ

きゅつと衣きぬずれの音がした。

「お掃りよっ」

言うなり、おややおねねの手をひっぱると、門口へとんでいった。

「失礼申し上げます」

長勝夫婦のわきに三つ指をつき、こましゃくれて言うのにさそわれて、

「おお」

又左は微笑し、そのまま意味ありげな視線を送って来た

——とおねねには思われた。

又左が去ると、おややは、さっそく長勝にとびついた。

「ね、何のお話だったの？ いいお話？」

「う？ うむ、うむ」

が、なぜか長勝の答えは訝えないのである。

おややはなおもしつっこく伯父にまつわりついた。

「ね、何なの。前田さまは何ておっしゃったの。ねえつたら」

「……………」

「いいお話？ 悪いお話？」

「ああ、ふむ、ふむ」

長勝がうわのそらの答えをするので、おややはじれた。

「ね、伯父さまつたら」

袴にぶらさがられて、やつと気がついて、

「うん、うん、いいお話だとも」

長勝はおややの髪をなでてやり、

「さ、あつちへおいで。伯父さまは、あねちゃと少しお話

をせねばならぬ」

あやすような口調でそういった。当然話の仲間入りするつもりだったおややは、あてがはずれて口をとがらせた。

いいお話。

おややにはそう言ったものの、おねねの先に立って奥の間に歩いてゆく長勝の背中には、何か思いあまつているらしいけはいがみえる。

奥の間に入るなり、長勝はびたりとふすまをしめ、板の間にどっかりあぐらをかいた。そのわきに、今しがたまで又左がすわっていたらしい円座のあるのを、おねねはちらりと見た。

「おねね、そなた、いくつになつたかの」

長勝がまずたずねたのは、それであつた。

「十四になりました」

「十四か、ふうむ。身近にいと、つい子どもだと思つてしまふが、もうそろそろ娘だなあ」

現代では十四といえはまだ子どもだが、そのころでは、たしかにもう「娘」のうちだった。十五、六で嫁ぐのはあたりまえだったから、すでに適齢期なのである。

「すると、嫁入り話がおきても、ふしぎはないということになるな、なるほど」

長勝はあごをなでた。長勝は背も高いが、あごも長い。なで甲斐のあるあごをしきりになでながら、彼は言った。

「又左どのの来られたのも、実はそのことだ」

おねねは、ぱっと赤くなつた。まるで目の前の円座に又左そのひとが坐つてでもいるかのように顔をそむけてさしうつむきながら、しかし胸の中でつぶやいた。

——そうですわ、伯父さま、もう私だって女ですわ。

とも知らず長勝はつづける。

「いや、俺もおどろいた。そなたにそんな話が舞いこむとは思つていなかったからな」

「……（まあ、伯父さまの認識不足）」

「あまり急な話で、いなやの返事もできかねた。ともかくお話だけ承つて帰つていただいたんだが」

「……（お返事して下さつてもよかつたのに）」

「その話の相手というのがだな」

長勝のあごをなでる手がとまった。

「おどろくなよ、おねね」

が、伯父の口からその人の名を聞いたとたん、おねねは、あつという顔付になつた。

いや、驚くな、といつてもむりであろう。

緊張のぎりぎりに来て、ふいに、ぐにやりとからだじゅうの骨が溶けてしまったような、何とも奇妙な瞬間をおねねは味わつたのだ。

——聞きちがひ。

そう思ひたかつたが、残念ながらそうではなかつた。

伯父の口からは、ついに、又左のママの字もとびださなかつたのである。